

教授会の思いで

— 誠 —

塚田康信

わが広島文教女子大学の校門を入ると左側の植木の繁みの中に、故武田ミキ学長先生の自筆の「誠」(行書)による漢字一字の碣(けつ)が、おごそかに建てられています。

この誠は先生に対して、後天的に附与されたものではなく、むしろ先生、生来の魂の叫びであると思います。

この碣の誠と次の会話に示されておりますように、先生は誠をもって生涯を貫き、とりわけ教育における理想的な指導者として、わが生涯を生き抜くためのみずからへの教訓であったと確信しておられたのであります。

私は本学在任中教授会の議長(平成元年・二年度)の任を拝しまして、ミキ学長先生の左方のかたわらにありま

一、大学人としてともに生きて

して議事の審議と進行にあたって参りましたので、その折のことを一言書くことにしたいと思います。

学長先生は建学の精神およびこれに基づく学生の学習と生活指導などの全般について、教授会の席上におきまして、誠に根ざす人間教育的指導論を具体的に精力的に話され、ときにはやや長い時間におよぶこともありましたが、そこで私は教授会開会の冒頭に、失礼なこととは思いつつも

「今日のお話は何分ぐらいの予定でありますか。」とお尋ねしますと、先生は明るくにこやかに

「〇〇分くらい」と申されました。お話が終わりました先生は

「今日の時間はどうでしたか。」と問われました。私は恐縮して

「だいたい時間内で。」とか「ややオーバーしました。」とか、ありのままに答えしますと、先生は続いて

「皆さんは私（学長先生）の気持を理解して下さったでしょうか。」とさらに問われました。私は

「理解して下さったと思います。」とお答えしますと、先生はさらに「ここから誠意をもって、実行していただくことが大切ですが」と申されました。

私は

「先生の誠と教職歴七十有余年の経験と情熱による信念に基づくご発言でありますから、実践されると思います。」とお答えしますと

先生は

「それならば私（学長先生）も、『うれしいことですが。』とか『安心です。』などと申されました。

こうした会話は終始、にこやかに謙虚な態度でありましたことに、私は感銘しこれを心の奥にとどめおき、また、

一、大学人としてともに生きて

かつて実の母をなくしたときと同じような悲しみのなかで、この思い出の稿をしたためました。

おわりに先生は、この誠の義を大きく広く深く捉えまして、現実の世の中の政治の貧困、教育の荒廢、經濟の不均衡、外交交渉の停滯、社会道德の退廢と混乱などのすべての問題解決は、この誠の一字につきるものとして積極的にこれの実践に努め、またこうした諸問題のすべては誠を基本としてはじめて正常に支えられているものであると信じ、これを遵守されておられたのであります。

——もつて銘すべき也——

注1. 碣：碑よりも一般に小さく、自然石のままのものが多く、辞書には、方なるものを碑といい、円なるものを碣といい、碣また碑の類なり。とあつて碑碣という熟語もある。